

東光寺は 1691 年に創建された禅宗の一派で黄檗宗の寺院で、江戸時代（1603-1867）に萩と長州藩（現在の山口県）の藩主をつとめた毛利氏の菩提寺になっている。毛利氏は同じ禅宗の一派である臨済宗を信仰していたが、17 世紀半ばに中国から来た黄檗宗に帰依した。毛利氏はまた、「昭穆葬」という中国様式の埋葬方式を採択し、奇数代の毛利家藩主と家族が東光寺に埋葬されている。東光寺には藩主一族にその忠誠心を示すため、500 基の石燈籠が並んでいる。初代と偶数代の藩主は、萩の南方あるもう一つの毛利家菩提寺である大照寺に葬られている。東光寺の敷地内には、総門、三門、鐘楼、大雄宝殿（本堂）など、国の重要文化財が数多くある。これらの建物はすべて、中国風建築様式で、建築技巧、精神性はその他の萩の仏教寺院には見られないもので、東光寺の特異性を際立たせている。